

森 亘 (科学技術会議)

医療の歴史は科学技術の発達と無縁ではあり得ず、というより以上に、近代の医療はその主たる部分が科学技術の上に成り立っていると称しても過言ではない。従って当然のことながら、最近における科学技術の目覚ましい進歩は医療にも大きな影響をもたらした。私自身が経験した近々40年程の間ですら、その変化は大きい。

例えば、私が医学生であった昭和20年代前半の頃、その当時はまだ、いわゆる名医なるものが存在していた。勿論、今日でも名医はたくさんおられるが、それとはやや異った意味においてである。経験とカンに頼った方法でピタリと診断を当てるなどはその一例で、有名な話としてある「名医」は、患者が診察室に入ってきて椅子に座るまでの間に、おおよその診断を付けていたという言い伝えがある。ところが最近では、こういった類いの名医は消失しつつある。そのことの善し悪しは別として、とにかく極く初心者を徐いては、できるだけ多くの医師ができるだけ同じような水準で物事を取り扱えるように、というのも近代科学技術の目指すところの一つであるらしい。ところで、こうしたいわゆる名医の有無などは枝葉末節の問題で、その他のより大きな、より大切な部分が大きく変わったのである。その大部分は「良い方に向かって」であろう。

しかし一方、このような科学技術の発達、その医療面への応用は、いろいろな所に、いろいろな種類の「差」や「垣根・隙間」を作ってしまった。それらは、例えば、患者と家族の間、医師(チーム)と患者(家族)との間、理学的知識の多い人と少ない人との間、富める人と貧しい人との間、富める国と貧しい国との間、等々に見ることができる。そして、そうした差、垣根・隙間が今後さらに拡大して行くことを心配している医療関係者も少なくない。ところで、こうした問題は、必ずしも医学、医療の場だけに限ったことではないのかもしれない。あるいは、科学技術全般についても言い得ること、存在する傾向なのかもしれないと思う。とすれば、広く、社会一般に問うてみたい。

この世の中のいろいろな場において、「差」とか「隔たり」がある程度存在することはやむをえない。いや、むしろあったほうがよい、とさえ考えている。専門家というものは、素人にできないことができなくてはならない。素人の知らないことを知っていなければいけない。いろいろの立場の人々が、余りにも「なあなあ」で事を運んでしまってはならない。相互の間には、やはり、ある程度の冷たさ、垣根がなくてはならない。努力すれば、こんなに良い思いができる、といった憧れ、目標がなくてはならない。よく働くものも、怠けるものも、その結果が同じであってはならない、と思う。

しかし、その様な「差」「隔たり」が、余りにも大きくなってしまふことは、これまた良くないことではなからうか。それは、個人個人の間の事柄でも、組織と組織との間についても、そしてまた、地方と地方、国と国の関係においても、同様である。科学技術の発達は、基本的には良いことであり、また、必要なことでもある。しかし、それによって、いろいろなところに、限度を越えた「差」「隔たり」が生ずるとすれば、これまた問題であろう。本学会々員の方々は、どちらかといえば、先に医療に関連して述べた幾つかの相對するグループのうちでは、いずれも優位に立っておられる人達であろう。科学技術を与える側と与えられる側、という点からすれば与える側である。富める国、貧しい国という見方からすれば、間違いなく富める国に住んでおられる。いや、個人としても富んでおられるであろう。理科的知識の多寡、それはもちろん優秀のほうに属する。そのような方々の集まりである学会でこうした話を申し上げるのはややおこがましいように思うが、どうか、皆様とは何等かの差をもって、あるいは皆様方との間に何等かの隙間を隔てて、もう一つの慎ましい、しかしその数は決して少なくはない、他のグループが存在している事も覚えておいていただきたいものである。

そして最後に一言、かつての「名医」は、患者が診察室のドアから入ってきて椅子に腰掛けるまでの短い時間に、その病状のみならず、実に種々様々の観察をしていたと言われている。